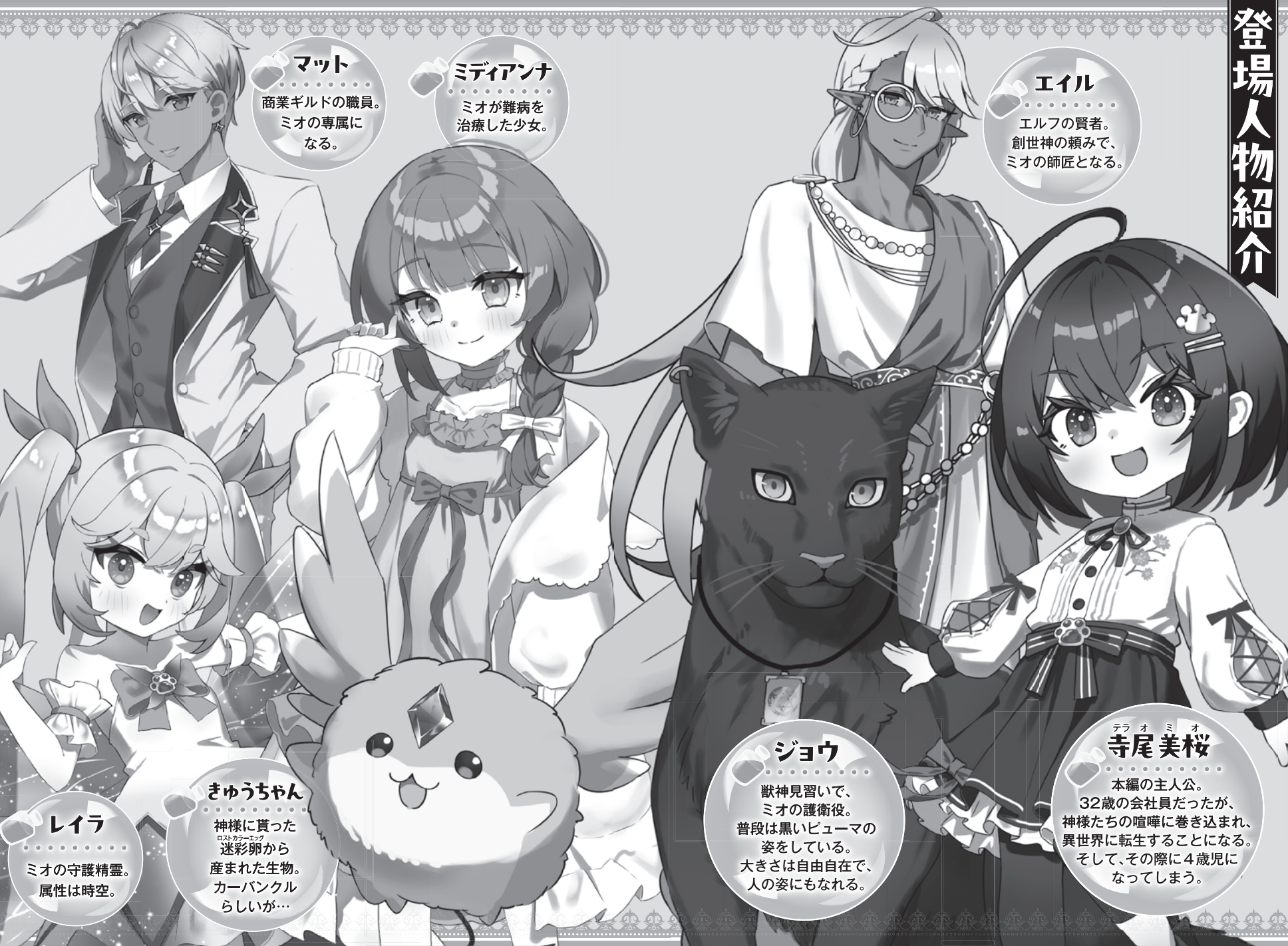


神のミスで転生
しちゃった、
ムカ女化
しちゃった! 2
神具【調薬釜】で、
異世界ライフを楽しもう!

Ichinokura

著 一ノ蔵

ill. にとろん



マツト
.....
商業ギルドの職員。
ミオの専属に
なる。

ミディアンナ
.....
ミオが難病を
治療した少女。

エイル
.....
エルフの賢者。
創世神の頼みで、
ミオの師匠となる。

レイラ
.....
ミオの守護精霊。
属性は時空。

きゅうちゃん
.....
神様に貰った
ロストカラーエッグ
迷彩卵から
産まれた生物。
カーバンクル
らしいが...

ジョウ
.....
獣神見習いで、
ミオの護衛役。
普段は黒いビューマの
姿をしている。
大きさは自由自在で、
人の姿にもなれる。

テラ オ ミ オ
寺尾美桜
.....
本編の主人公。
32歳の会社員だったが、
神様たちの喧嘩に巻き込まれ、
異世界に転生することになる。
そして、その際に4歳児に
なってしまう。

第一話 叡智の使者

神様のミスにより命を落とした私——三十二歳の会社員・寺尾美桜。私はそのお詫びとして、異世界に転生することになった。ただ転生の際、神様から様々な加護を貰った影響により、四歳に若返ってしまう。

そんな予想外の出来事もありつつ、私は獣神見習いで黒いピューマのジヨウを護衛役に、異世界へと降り立ち、神に愛されし『魔従族』の末裔という設定で、賢者エイルの弟子として自由気ままに生きていく予定だった。

しかし、ちょうどそのとき、世の中は高級ポーションの不足で混乱の真ただ中。さすがに、自分が解消する力があるのに、それを見過ごすわけにはいかない。

そこで私は、高級ポーションを独自に作るために材料集めに奔走し、また師匠の人脈を使って生産・流通の仕組みまで整えた。同時に、謎の病気に悩まされていた領主ロレンツォ——ローリーの姪・ミディアンナさんを救うべく、神具【調薬釜】を使って神酒を作る。

神酒を飲んだミディアンナさんは、無事に完治するのだが——

「どうですか？ 痛いですか？」

私はミディアンナさんの足にタオルを置き、ふくらはぎを揉み揉みしている。病気で五年も寝たきりだったから、リハビリをしないとね。

師匠とローリー様は王城に向かい、ミディアンナさんの父親で、商業ギルドのサブマスターでもあるサミュエルさんも仕事に戻ってしまい、この部屋には私とジョウとミディアンナさんしかない。

「大丈夫です、ありがとうございます」

揉まれると痛いのか、少し顔が強張っている。私の子供の力でこれでは、しばらくマツサージだけになりそうだな……それも、揉み返しが起きても怖いので、軽く擦りながら、ユラユラと筋肉を軽く揺らしていく。

不思議そうに見ているミディアンナさんが、私に声をかけてきた。

「このような治療は聞いたこともありません。ミオさんは、どこで学ばれたのでしょうか？」

「ふふ……ミディアンナさんは、好奇心旺盛と言われませんか？」

「私つてば……申し訳ありません！」

ミディアンナさんは、口に手を当て、恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「責めたわけではありませんよ？」

薬師ギルドアターキル支部の会長であり、ミディアンナさんの祖母であるジョハンナさん譲りの浅葱色の髪を、彼女は緩く編み込んでいる。紅茶色の瞳は恥ずかしそうに彷徨っていた。

「ミディアンナさんには、これから色々お手伝ってもらいますし、私の出自について話しておきましよう」

私はマツサージの手を一旦止め、鞆から身分証を取り出した。

（かまわぬのか？）

ジョウが念話で私に問いかける。

（大丈夫だよ）

従魔のジョウが聖獣（本当は獣神見習いだけ）であることや、私や師匠が神様の加護を授かっていることはバレているのだ。おまけに、彼女の病を完治した神酒の作製もできることまでバレている。この際、身分証には私が『魔徒族』と書かれていることを教えたところで、なんの不都合もない。そもそもそれは、私がこの世界で生きていくための『設定』でしかないわけだし。

それよりも、私が公的にはどんな存在か伝えておくほうが大事だ。もちろん、まだ話せないこともある。

師匠には伝えているが、調薬釜で作れるのは、ポーションだけではない。



鑑定結果の『所持者の負担なく製薬もできる優れもの』のくだりから、怪しいとは思っていたけれど、素材さえあればなんでも作れるようだ。

なんでわかったかというと、調薬金を少しだけいじっていたら出てきたのだ。いろんなアイテムのレシピが――

このことは、調薬金が神具であることとあわせて、まだ内緒だ。もし教えたら、きっとびっくりして、彼女の身体に負担をかけるからね。

「まあ……ミオ様ってば、あの魔從族でしたの!？」

身元証を見たミディアンナさんは、ガバツと身を近づけてきた。なんだろう？ 思ったより食いついてきたな……近い近い！ しかも、さんから様になってる!？」

「私は、里の最後の生き残りなだけなんですよ。最近までお婆様とジヨウとで暮らしてたけど、お婆様も歳には勝てなくて……」

私がうんうんと頷いていると、(我が主人ながら、大根役者だな)とジヨウの茶々が入る。

でもさ、こっちは娯楽が少ないせいもあると思うけど、こういうお涙ちょうだいの話には、みんな毎回騙されてくれるんだよね。

いや、やっぱり私の見た目？ 見た目の効果って偉大なのかな？

「私としたことが……申し訳ありません」

頭を下げるミディアンナを手で制し、私は笑みを浮かべる。

「ちゃんとお別れもできたので。それに、ジヨウもいますし、大丈夫です」

私の「ちゃんとお別れをした」で、彼女の表情が和らいだ。

「それにしても、師匠やローリー様をはじめ、魔従族とはいえ、四歳児に何を期待するの？ っ
て感じですよにえ」

頬に手を当て首を傾げれば、ミディアンナさんも顎に手を当て考えはじめる。

「多分ですが、魔従族の別名が『叡智の使者』なので、四歳児といえども世間で知られていない貴重な知識を持っていると考えてしまうのではないのでしょうか？ 実際にそうだったわけですし」

「なるほど」

人生の中で得てきた知識や経験が、その人を形作るもんね。魔従族として育てられたのなら、たとえ幼くても何かしら魔従族の特性を持っているって期待されるのだろう。

私がミディアンナさんにそう話せば、彼女は思うところがあつたらしい。

「確かにそうですね。では寝たきりだった私は、ミオ様のためにも、もっと色々なことを経験しなくてはいいですね！」

両腕で力こぶを作るポーズで、決意を新たにしていた。心なしか、鼻息も荒い。美少女（十三歳）の鼻息……どこかに需要はありますか？



ミディアンナが回復したのを見届け、俺——ロレンツォとエイルは、王城にいる宰相に会っていた。この宰相こそ、現王の代わりに国を動かしている、いわば真の統治者だ。俺とエイルは、彼と向かい合うようにソファに腰かけている。

彼の名は、ダニーロ・フェルタ・アルダート。始祖の時代から続く名家である筆頭侯爵家の当主だった。

ミオが見たら、チョビ髭が印象に残っただろう。ちなみに、ダニーロは指摘されることを嫌がるだろうが、現王と同じく、若干髪の後退が気になるお年頃である。

「では賢者殿は、国中……いや、大陸中から高級ポーシオンが消えかけると言うのか!？」

「今のままいけば、間違いなく消え失せるでしょう。下手をすれば、高級ポーシオンを巡って、暴動が起きかねません」

「商業ギルドからも注意喚起の報告は受けていたが、『現在、各地の状況を調査中』で詳細はわかっていなかったのだ」

宰相の顔は、もはや真つ青を通り越して蒼白である。彼の頭の中では、様々なことが目まぐるし

く渦巻いているに違いない。

「それはそうでしょね。商業ギルドも、余計な混乱は避けたいはずです。各支部の状況を確実に確認するまでは、下手な報告はできません」

例えば、私の治めるアターキル領地は、深層の森に隣接している。街にいる高位ランク冒険者の主な依頼は、深層の森の中部から深部手前の魔物の駆除だ。そんな魔物の一撃は重い。怪我をしたら一大事。だから、高級ポーションが必要不可欠だ。

高級ポーションがなければ、神官の治癒魔法が必要になるのだが……それは教会まで持てばの話しかも、どこまで治療できるかは、教会の神官の腕次第。そんな博打に手を出すつもりがさらさらない高位ランク冒険者は、駆除依頼を受注する際は、高級ポーションを欠かさないのだ……ということは？

高級ポーションが購入できなければ、危険な地域の魔獣討伐の依頼は受注せず、安全圏にある依頼を選ぶ。

そうなると、魔獣は増え続け、やがてスタンピードという魔物の暴動が始まるのだ。

「あああ……やつと、十年前の流行り病の爪痕が癒えてきたところなのに、あの腐れ前教皇のせいだ！ 今回の被害額を試算し、聖国へ賠償請求してやろうか!?」

悲劇的な未来が見えたのか、宰相の目は血走っている。

「よいのではないですか？」

国際問題に発展しかねない発言を飄々としたエイルに、『お前は賢者の称号を返上しろ！』と、俺の脳内は荒れる。ただ、宰相は我に返つたらしい。

「……今回の件は、前教皇に責任がある。だが聖国は今、ウルシア様の神罰の影響で、蜂の巣をひっくり返したような騒動のはず——」

「ええ。今は、教皇の座も空席ですね」

「ならば、今ではない。最終決定権を持つ者がいない今は、抗議の返事さえできません」

つまり宰相は、今ではなく、聖国の基盤が整ったときを狙うつもりだ。

「まあ……ウルシア様が、聖国や薬師ギルド本部のことはどうにかすると仰っていましたので、我々は自国の窮地を乗り越えることに注力すればいいでしょう」

「ウルシア様にお会いしたのか!？」

勢いよくソファから身を乗り出してきた宰相に、エイルは即座に魔法で結界を張った。俺は、エイルの対応に、自分が苦虫を噛み潰したような顔をしたのを自覚する。

「ええ。今日の訪問は、その件も含まれています」

エイルが微笑を浮かべ、フィツと軽く手を振れば、例の映像のお出ました。もはや便利道具扱いだな。

『ロレンツォ・アターキル』
「はっ！」

例の映像が流れ出す。俺が膝をつき、ウルシア様に返事をしている場面だ。ついでになぜか、宰相まで膝をつき、同じように返事をしている。

『是非、ミオの手助けをしてあげてちょうだい。私も聖国を見ていましたが、教皇はついに一線を越えました。我々も……もはや手を出さざるを得ない状況になったのです。聖国や薬師ギルド本部のことは我々に任せ、ミオやエイルたちに協力をお願いします』

「畏まりました！」

『あなたには、辺境伯としての仕事がありますからね。高級ポーションの製作はミオたちに任せ、サポートをお願いしますね』

「畏まりました！」

最後まで、映像の俺と宰相の音がハモっていた。

いくら本人に了承を得ているとはいえ、エイルは活用しすぎではないだろうか？

ウルシア様の上司である創世神ガイア様と喋ったことがあるらしい……もしかしたら、彼の感覚が麻痺してきているのかもしれない。

「……ふう。先日、空に浮かばれしウルシア様の半身を拝覽させていただいたが、今回は全身を拝謁できるとは、なんたる誉れか。我が人生に悔いなし！」

いやいや。まだ人生終了しないでください。

宰相に人生終了されたら、この国が終わります。

「それで、ご協力いただけますか？」

宰相が余韻に浸っているときに、水を差すとはこのことか。俺はまたしても、空気を読まない男へ呆れの視線を向けた。だがそれと同時に、少しだけ助かった気持ちもある。

誰か、五十手前の親父の恍惚とした表情を見たい？ 宰相は、教会への信仰心というよりも、ウルシア様自身への崇拜だな、きつと。

「っ!? おほん！ もちろんだとも！ ウルシア様のご意思だ。従う以外、選択肢はあるまい。それで賢者殿とアターキル卿は、私に何を望むのだ？」

「高級ポーションの作り手は、薬師ギルド本部が囲っているのをご存知ですよね？」

「ああ、石化野郎の命令だったんだらう？ だがもうやつはいない。今の問題は、素材だ。高級ポ

ーシヨンの作り手がいても、素材がなければ話になるまい？」

それは、誰もが知る事実だった。高級ポーシヨンの素材は聖域にのみ自生する。そして、聖域は、教皇と加護を授かった者しか立ち入ることが許されない神の領域。だからこそ、聖国及び教会は、それを盾に強大な権力を誇示し続けてきたのだ。

「アルダート宰相は、私が保護した少女のことをご存じですか？」

「もちろん。以前、彼女のメダル確認のために賢者殿が登城した際に、話は聞かせてもらったからな」

——魔徒族の末裔を名乗る少女の話。

「彼女の目には、神の関係者である金の色彩があります」

「なっ!? ……つて、賢者殿にもあるではないか!?」

「そうですね。詳しくは話せませんが、彼女の師匠となった褒美だそうです」

「褒美？ 誰がそんな——」

言葉の途中で気づいたのだろう。宰相は顔を手で覆った。

「……魔徒族の彼女には、世間が落ち着くまでは、大人しくしてほしかったのだが……」

苦々しい表情のまま目を瞑った宰相の願いは叶わない。

「残念ですが、既に手遅れですね」

「……というど？」

「まもなく、高級ポーシヨンがアターキル領より出荷されますので、そのことをお知らせに来ました」
「なんだつて!?」

ソファを蹴倒さんばかりに立ち上がった宰相の顔は驚きに満ちていたが、目には期待の色も見えなかった。

「今回の事態を重く見た彼女——ミオが、このロレンツォに願い出たのが発端です。既に、薬師ギルドアターキル支部の会長ジョハンナに、独断救援の実施をお願いします。薬師ギルドアターキル支部では、彼女が選任した職員が、検品・鑑定を担当します。十日後には、高級ポーシヨンが八千五百三十二本で上がる予定です。正確に言えば、八千五百三十二本もの高級ポーシヨンを一度に検査することは、『人手も労力も時間も無理!』とのジョハンナの判断により、三日ごとに行ってきたものから検査する流れになります。いずれにせよ、高級ポーシヨンの配布が十日後には可能になります」

「十日後……既に円滑に進んでいるのだな。私はどうすればいい？」

「実は、高級ポーシヨンの素材採取はミオたちですが、製薬はダークエルフにお願いしているのです」

「よりよつて彼らにか!? ……だが、今はそれが最善か」

宰相の頭にもダークエルフに対する世間の悪評がちらつと過つたのだろう。

「ええ。彼らは製薬を得意としていますし、魔法契約も結んでいますので、問題ありません」

「世間的には、製業者不明の高級ポーションにするのか？」

「ええ。ですが――」

「薬師ギルドのジョハンナのもとで検品をすれば、正規品としての大義名分は立つというわけか」
「はい。あと、配布については、深層の森に沿う領地へ優先的に行いたいのですが、ご意見をいただけませんか？」

「私も賛成だ。低級・中級ポーションは問題なく流通しているからな。市井はそれで事足りるだろう。万が一のためとして、村・街につき三個配布しておけばいいのではないだろうか？」

低級は切り傷や打ち身といった軽傷を治し、中級は剣の深い切り傷や捻挫などの中等度の傷を治す。

熊の爪に挟られるような怪我を、街や村の中にするとは考えにくい。それで保険として、三個という数が出たんだろう。一個や二個では少ないという文句も、三個ならば、口を嚙むラインだ。

冒険者へ的高級ポーションの販売は、冒険者ギルドに任せるつもりだ。

それと、一番大事なことで、購入時に契約書にサインを求めろ。それは、転売防止の契約書だ。これを義務にすると確約できないギルドには、高級ポーションを配布しない。

高級ポーションが不足する事態になっている今、大陸中で値段が高騰している。

だが、今回の高級ポーションは、今までの値段である大金貨一枚で販売する。供給安定後の値崩

れを心配したジョハンナも、ミオの善意の考えを聞き、賛成してくれた。

その考えを書いた『提供者の善意の説明書き』を薬瓶に貼付することで、店員が説明する手間を省くことにしている。これらの案も、ミオたちである。

冒険者は依頼書を読む必要があるから、最低限の読み書きができる。これで、高級ポーションの供給が安定したときの値に文句を言うやつはいないだろう。

「なんて良心的な試みなんだ！ 先見の明をお持ちのミオ様に会ってみたい気持ちもあるが……陛下のことがあからな。今はやめておこう。しかし、冒険者ギルドや薬師ギルドは国を跨いだ組織ゆえに、強制はできないぞ？ 私の名義で、各ギルドへの通達くらいはできるかな」

「強制はできずとも、確約ができなければ、販売はさせません。今はどこも品薄で、喉から手が出るほど欲しい品です。ギルド支部によつては、多少の審議も要するでしょうが、高級ポーションを販売するには、結局条件を飲むしかありません。どのみち彼らに、選択権などないのですよ」

エイルがそう言って微笑めば、俺と宰相は、微妙な表情で頷いた。

第二話 新たな騒ぎの予感

かくして、高級ポーションの流通に関する声明文が、薬師・冒険者・商業・錬金^{れんきん}ギルドへ出された。書面を出したのは、フリーター王国で賢者を拜命している師匠だ。私——ミオが発案者ではあるけれど、未成年を矢面に立たせるわけにはいかず、保護者の師匠が出てきたわけ。

【高級ポーション不足への救済対策】

発案者：ミオ・マグワイア・テラオ

責任者：エイル・リュタ・ラ・マグワイア

聖国の教皇率いる薬師ギルド本部の一部の人物たちによる高級ポーションの私物化・利潤^{りじど}搾取^{さくしゆ}に対し、女神ウルシア様の神罰^{くた}が下りました。

その影響で高級ポーションの生産、流通^{りゆうつう}が滞^{とどま}っております。

そこで我らの活動拠点であるアターキル領の薬師ギルド会長ジョハンナは、ミオ・マグワイア・

テラオの発案により、会長権限による独断救援を行うことになりました。

☆各担当者

◎素材採取：ミオ・マグワイア・テラオ

◎作り手の確保：エイル・リュタ・ラ・マグワイア

◎納入時の品質検査の実施員と場所の提供：ジョハンナ

◎各地への連絡・要請などの手続き・手配：ダニーロ・フェルタ・アルダート、ロレンツォ・アターキル

☆高級ポーション分配方法や条件、数量などにつきましては、別紙をご覧ください。

「それで、各種ギルドが大わらわなんですか？」

ミディアンナの部屋で、日課となりつつある彼女のマッサージをしながら、この場にいたサミュエルさんに質問をぶつける。

「そうなんですよ。エイル様が出した書状に、巨大蜂^{ビツツビー}が襲来したかのように、みんなが右へ左への大騒ぎです！」

そうやって腕を大きく上下に振るサミュエルさん。ミディアンナは、胡乱な視線で、大げさな動作をする父親を見つめている。私も内心は、彼女に同感だった。

ちなみに、私がミディアンナと呼び捨てにしているのは、彼女自身の希望で、私が雇い主だからそうだ。

サミュエルさんは、商業ギルドのサブギルドマスターだ。そんな騒ぎの中で、ギルドを不在にしてはいけないだろう。

なお、彼はここに、未成年の彼女のために様々なルールを盛り込んだ就労誓約書を届けに来ている。そして、既に用は済んでいた。なので、私とミディアンナとしては、『早く仕事に戻れ』である。ちなみに、ミディアンナからは、病弱で憂いを帯びた薄幸の美少女の面影は消え、頬にも赤みが出てきた。これで筋力を取り戻せば、普通の少女と変わらない。

ここで急に、サミュエルさんは話題を変えた。

「秋の収穫祭では、うちはずっと司会進行の役で来てたのに、去年からの祭り改革で、役割はクジ引きで決めることになり、ついに今年は催事担当になっちゃったんですよ。今年の司会進行は、薬師ギルドが担当みたいです。高級ポーションのことでんやわんやしてるのに、催事担当になるなんて、うちのやつもクジ運がないと思いませんか？」

同意を求められても困っちゃう。今はどこのギルドも忙しいのは一緒だろうに。

ただ、そのクジを引いた人が、ひどい目に遭っていませんように……南無。それより、祭り改革とかいうのが気になるなあ。

「大体、なんで祭り改革なんてことをする羽目になったんですか？」

「なんでも、今までの催事が同じことばかりの繰り返しで飽きたんだそうです。今までも苦情が入ってたみたいなんですけど、ハズレを恐れた街の古株連中らが、安定を重要視した結果、内容を変えることはしなかったらしいんですよ」

「ハズレ……」

そう呟いた私が、ふと部屋の隅に控えるメイドさんにチラッと視線をやれば、彼女は一步前に出て、一礼した。

「発言をお許しくださいませ——」

「お願いします」

「では——」

メイドさんによれば、去年の祭り改革は成功だったらしい。今までは、吟遊詩人や旅一座の歌、劇、踊り子の舞踊が定番だったという。

それが一転、とある古株の孫の『いつも同じでつままないっ！』という一言で、改革に繋がったそう。

「去年は、懺悔大会で大いに盛り上がりました。多少の犠牲はありましたが、身から出た錆ですしね。誰も気にしていません」

私は念話でジヨウに呟く。

(世知辛い……)

(そして、去年の成功に味を占めた祭りの実行委員会が、今年も同様に、盛り上がる催事を企画しろ！ と無茶振りをしているわけか)

(無茶振り……とは言うけど、祭りは、街のみんなの寄付がなければ成り立たなくて、そして古株の人たちは多額の寄付をしているから、その意見には従わざるを得ないでしょ？ 中間管理職よろしく、狭間に立たされた人間には、辛いものがあるんだよ)

サミュエルさんが嘆息した。

「まったく……実行委員だけでなく、爺いば……んんっ!? 年配者たちまで、去年のような素晴らしい催事をせんのなら、祭りに寄付はせん！ とか言い出したらくて……」

今、爺い婆あつて言おうとしたな？ サミュエルさんにしては、口悪いな。それぐらい切羽詰まってるのかね？

「去年、懺悔大会で盛り上がりましたが、毎回そのようなイベントをするのは気が引けますし。ただ、子供たちが期待しているのも事実。だけど、そう簡単にアイデアが浮かぶはずないでしょう？

準備期間もあまりありませんし……催事班のみなさんで、頭を悩ませているところなんですよ」

「なるほど。確かに面白くないお祭りに寄付するくらいなら、家族で外食に出かけるなどしたほうが楽しいもんにえ」

「祭りまではあと二ヶ月しかないというのに、前教皇の混乱に加えて、高級ポーション分配も決まったし！ やることが山盛りすぎて、真新しい斬新な企画なんて、無理なんだよ！ 自殺行為だ！」
サミュエルさんのいつもの口調がだんだんと崩れ去り、かなり追い詰められている感じがする。しかしこの場でなぜ粘るかと思えば……そうか。こいつは、私のアイデアが目的か？

そのとき、部屋の外から声が聞こえた。

「ほお？ ……ならば、過労死するほどこき使ってやろうじゃないか。ええ、サミー？」

そして、ギーと、扉が勝手に開いた。

「「え？」」

ジヨウ以外の視線が、扉へと向かう。そこには、若干白髪の交じる茶髪を後ろに撫でつけた壮年の男性が立っていた。しかし、撫でつけた髪はところどころほつれ、目の下にクマを飼っている。

「……フェリー」

フェリーって、船の？ なんてボケが霞むほど、サミュエルさんにフェリーと呼ばれた男性の顔は怒りに燃えていた。

壁際に立つメイドさんが立ち塞がろうとしているが、気圧されていて顔が真っ青で気の毒である。
(ジョウ！)

(ああ……)

ジョウに注意を促すものの、彼は私と同様、フェリーさんを脅威と感じていないせいか、返事に覇気がない。だって、『サミー』なんて愛称で呼ぶ人物だよ？ 十中八九、サミュエルさん関連の方でしょう？

少しだけお腹が出ているフェリーさんだけど、ビールが大好きですか？

フェリーさんは商業ギルドの人で、サミュエルさんを連れ帰って、仕事をさせたいらしい。しかし、サミュエルさんは「嫌だ！」と駄々を捏ねている。そんな平行線の話し合いが続いており、思わずため息が出る。

そもそも、ここは乙女であるミディアンナの部屋である。むさい男二人の言い合いは、よそでもらいたい。

(ミオ、何かアイディアを与えれば、いい加減に去るのではないか？)

(いいの、ジョウ？)

(何がだ？)

(だって私が手を出せば、タダじゃ済まないのは知ってるでしょ？)

(そうだなあ……ミオの性格からして、手を出したら、最後まで面倒を見ねば落ち着けまい？)

(そう！……だから、「いいの？」って聞いたの)

(……仕方あるまい。ウルシア様からは護衛だけでなく、見守ることも頼まれている。多少苦言は呈すかもしれないが、よほど人の域を超えていなければ、反対はせん)

(……マジで!? ありがとう！ いやあ……祭りって前世から大好きでさ！ 異世界の収穫祭なんて、気になって気になって仕方なかったんだよね！)

私が満面の笑みを浮かべたのを見たジョウは、呆気に取られたものの、すぐに諦めの表情を浮かべた。

「いい加減にしてくださいませ、お父様！」

私とジョウの間で話がついたとき、抗議の声を上げたのは、部屋の主にして娘のミディアンナだ。目尻を上げ、唇は一字。

「一杯の怒り顔だけど、可愛いという感情しか湧いてこない。おかしいな？」

「ミディアンナ、これはだな……」

「嬢ちゃん、そのだな……」

ミディアンナの表情を見て慌てた二人は、同時に言い訳を始めた。そこへ私も参戦する。

「そもそも……フェリーさんでしたっけ？ あなたは、ミディアンナが回復して初めて会うのでは？ それを、ノックもなしにレディの部屋に突入したあげく……おめでどうぐらいあつてもいいんじゃないませんか？」

「っ!? ……すまない！ サミーに聞いて一緒に喜んだから、すっかり祝った気になっていた」

フェリーさんは素直に頭を下げる。これを見る限り、きちんとした大人のようだ。

「改めてにはなるが、嬢ちゃん、全快おめでどう」

「ありがとうございます、フェリーさん」

入室したときとは異なり、とても穏やかな表情で祝ってもらったミディアンナは、微笑みを浮かべた。さて、こんな穏やかな顔ができる人を阿修羅にするサミュエルさんには、さつさと職場に帰還していただく。

私がミディアンナに視線を送れば、彼女は一つ頷いた。阿吽の呼吸みたいで嬉しいが、彼女も父の失態をこれ以上見たくないだけかもしれない。

そのとき、フェリーさんは、私を見た。

「それと、挨拶が遅くなり申し訳ございません。私は、フェルディナント・ロギシーと申します。

アターキル支部の商業ギルドマスターをしております。よろしくお願いたします」

本当に、草原を風いだように静かに優雅な礼をする人だ。でも、商業ギルドを束ねるギルドマス

ターだからね。曲者に違いないだろう。

「ご丁寧ありがとうございます。私は、ミオ・マグワイア・テラオと申します。こちらこそ、よろしくお願いたします」

私もぺこりとお辞儀をすれば、フェルディナントさんの黒靴が視界に入った。

見た目は、ビジネスシューズだ。素材は革で、足の甲の部分に靴紐を通してある。靴の側面には、赤色などの刺繍がある。一種のお洒落だろうか？ こんなときこそ鑑定だ！

(鑑定！)

バイコーンの革靴…水や汚れや乾燥に強い皮革で作られている。使い勝手がいいので、幅広い用途で使われている。雨の水濡れやそれに伴う乾燥の劣化を防ぎ、手入れもしやすいので、シミがでにくいという特徴もある。カジュアルな服装にも合う。また、靴の側面には、疲労軽減の魔法刺繍がワンポイントとして施されている。

「へえ……魔法刺繍なんてあるんだ」

私の眩きに、フェルディナントさんの目が光り、ジョウはあちやーと額に前脚を置いた。

二人の急な変化に、私は、フェルディナントさんとジョウを交互に見やる。

(ミオは普段慎重なくせに！ どうしてこんなときに限って軽々しいんだ!?)
「てっ!? たっ!?」

ポフンッ！ ポフンッ！ と、ジョウウの尻尾しうぽで頭を叩たたかれた。痛くないのだが、(私の身長が縮むだろ!? ヤメレ!)と、サツと避ける。

(はあ……もう好きにしろ。だが、あまり能力を知られるな)

(ああ……そこに怒ってたわけね。了解です！)

ジョウウにはまるつきり不審な目で見られてしまった。どうやら、信用はされていないらしい。

「この靴を鑑定したのですか？」

「はい。お洒落しゃれな靴でしたので、気になっちゃって……」

「駄目だめでしたか？」と上目遣いでおそろおそろ尋ねてみれば、フェルディナントさんとはとっつても

いい笑顔。

(うわあ……似非笑顔えせの匂においがプンプンするわあ)

(だから、いわんこっちゃない)

ジョウウの投げやりなコメントをいただきました。

「いえいえ。さすが、お目が高いなと感心していたところですよ？」

ん？ さすが？ ……なんか含みを感じるな。

「さすがとは、どういう意味でしょうか？」

私とフェルディナントさんが会うのは、今日が初めてのはずだ。

「それはエイルが——」

「それについては、私が話しますよ」

「サミー……わかった」

サミュエルさんの説明によれば——

ミディアンナを従業員とするなら、商会を作らないといけない。

だが商会の主あるじとなるのは、四歳の少女。しかも今は、ポーシヨンの素材採取の大事な時期で、師匠が私をあまり人前には出したくはないとのこと、代理で登録に来たらしい。そのときに話を聞いたそうだ。

(いつのまに!? 私、そんなこと一ひとつ言も聞かされてませんけど!?)

(あゝ。『薬事法に触るから、薬師ギルドにさっさと登録させる』とジョハンナが言った頃から、考えていたのではないかと？ ミディアンナ嬢の薬代の支払いもあるしな)

(……ってことは、薬師ギルドの登録も済んでるの!? 身内になら、ポーシヨンを作って飲ませても法に触れないって言うから心配してなかったのに！ ……っていうか、私は薬師ギルドの試験を受けてませんけど!?)

私がアワアワと慌てる、フェルディナントさんが頭にポンと手刀を落としてきた。

「ていつ！」

「痛いっ！」

痛くはない。ただのノリである。

「落ち着いてください、ミオ様。それと、サミュエルが持ってきた就労誓約書にも書いてますが、ミオ様のは、単独じゃなくて複式のギルドカードです」

指を振って「チツチツチツ！」と言うフェルディナントさんにイラッとしながらも、次の言葉を待った。

「商業ギルドCランク、薬師ギルドEランク。薬師ギルドのは未試験のため、仮のランクです。落ち着けば本試験が待っていますから、ちゃんと勉強してください。あとは、冒険者ギルドEランクです。ですが、よかつたね。本来の冒険者ギルドのランクはFが始まりですが、ミオ様は、高級ポーションへの功績でEランクに一飛びです！ 商業のほうはCランクでないと、従業員を雇えないので……逆に言うと、実はCランクまでは金を積みめばどうにかかります。だからといって、商売が上手くいくかはまた別の話ですけどね」

「ワハハ！」と高笑するフェルディナントさんに、四歳児に対してやりすぎだよ、と突っ込みたくなる。

おそらく、私のギルドカードは師匠が持つてるだろうけど、彼は一体何を考えて……どう考えたって、冒険者ギルドはいらないでしょ!?

「……はあ。必要に迫られたギルドカード登録とはいえ、まさか本人抜きで済んでいるとは……」

寝耳に水とは、まさにこのことだろう。

「エイル様も、色々と考えているんだよ。今は高級ポーションの納品で、薬師ギルドにいると思うけど……」

私に慣れてきたのか、少しでも口調が砕けてきたサミュエルさん。

そんな彼からは、『君はお留守番だよ?』という視線をいただいた。色々と聞きたい衝動に駆られているのを見抜かれている。

(え〜い！ こうなりや、ヤケだ！ 祭りを楽しんで憂さ晴らししてやるう！)

(……好きにやれ)

もはや諦めムードのジヨウは、定番の伏せの格好でうたた寝を始める。

私はサミュエルさんに尋ねた。

「イベントはどこでするんですか?」

「職人通りにある広場だよ。そこにステージを設営するんだ」

「なるほど」

「それがどうしたの？」

「賞品を置ける場所を確認していました」

「ステージがあるならば、見栄えがよくなり、さぞゲームが盛り上がることだろう！」

「賞品？」

「準備はちよつと大変かもしれないんですが、住民参加型ゲームとかしたら、みんなが楽しめるかなと思って……」

私の言葉に、この場にいた全員がぐりと首だけを動かしてこちらを向く。

「びゃ!?」

さすがに、首だけはホラーやで。ジョウじゃないけど、全身の毛が逆立つよ。私は慌てて、ジョウの腹に避難する。

(どこに頭を突っ込んでいる。雛の真似事か?)

(視線を遮れば、なんだっていいんだよ! ……あと、安心要素は必須!)

(ま、まあ……そういうことなら仕方ない。しかし、ゲームと言ってもたくさんあるぞ。何を提案するつもりだ?)

(そんなの決まってるつしよ。祭りやパーティーの盛り上げ役と言ったら、ビンゴつしよ!)

(ビンゴ大会か。こちら仕様でやるとなると、なかなか難しいかもしれないぞ?)

ふふんつと調子よく発表すれば、至極当然の意見が飛び出した。

(それをなんとかするのは、サミュエルさんの役目では? 私はアイデアを期待されただけで、

その他については、何も頼まれておりません)

(要するに、頼まれればやるんだな?)

(乗りかかった船だし? 面白そうじゃん! でも、ただはいや。なあなあだとあとから採めそうだし。そこはちゃんと区別しなきゃ!)

(安いか安くないのか……)

呆れた眼差しあきまなざしのジョウだけど、これからの生活費を稼かせがなければいけない自覚はあるのかね? 稼かせげるときに稼かせぐ! これ常識ね!

「失礼いたします」

私がジョウの腹に頭を突っ込んでいるとき、ミディアンナの部屋に男性が入ってきた。丁寧に扉を開けるも、すぐに大声を上げた。

「ギルドマスター! サブマスター! あなたたちはいつまで油を売っているのですか!? 全商業

ギルドの映像会議の時間が迫っていますよ!」

映像会議? リモートみたいなのが出来る魔道具があるのかな?

「祭りの問題が片つきそうだったから、つい……」

フェルディナントさんが言い訳をしている。

「今回は全大陸商業ギルドの映像会議だと申し上げていたでしょう!? 祭りも大切ですが、我らアターキル支部の面目も考えてください!」

「——確かになあ……」

「ん? なにやら幼女の声が……」

大陸全土ということは、商業ギルド本部グランドマスターであり、クリーク連合共和国元首、師匠の大叔父のピアチェルト様もいるのかな。元首の任期は、まだ数日残ってたもんね。

「——全大陸の大物たちが参加するのに、一支部だけマスターじゃなくて格下の職員の参加じゃ、やる気あるのか!?」って話になっちゃうよにえ」

「なにやら、子猫が紛れ込んでいるようですね……ですが、彼女の言うことはもつともです! 二人とも早くお戻りください!」

「わかったわかった。戻るから、そう急くな。まだ、ミオ様から住民参加型ゲームというのを、詳しく聞いてないんだ」

ん? 戻るの?

私はフェルディナントさんの言葉を聞き、ジョウのお腹から頭をスポツと抜いた。

そして私は、頭髮がぐしゃぐしゃなまま、新たな男性の、重色の瞳とかち合った。灰色の刈り上

げられた髪型に、肌色は少し濃いエキゾチックさが醸し出され……好み。細身だし、優しい雰囲気
のイケメンだ。

「ふふっ。可愛いとお嬢様ですね。どこに隠れておられたんですか?」

「ジョウのお腹の下ですよ」

「彼は、ジョウ様と言うのですね?」

「はい! 私の従魔です」

可愛いでしょ? と胸を張れば、彼は口元に手を当てて微かに微笑んだ。

「ふふっ……よろしく願いますね、ジョウ様」

「がう! (うむ!)」

「それで、ギルマスたちが言っていた『住民参加型ゲーム』というのを教えていただきたいのです
が……」

おかしいな? 彼は、フェルディナントさんたちを連れ戻しに来たのでは? このままだと、ミ
イラ取りがミイラになっちゃうよ。

「今日は時間がないんでしょう? ピアチェルト様たちも出られる会議があるのでは?」

「ピアチェルト様をご存知で!」

彼の目が驚きで開かれる。ああ………役得。

「マット……彼女は、ミオ・マグワイア・テラオさんだ
フェルディナントさんが紹介してくれた。」

「あいつ!? ……と、失礼いたしました」

「いえ……」

私は、あなたとも初対面ですよね!? 『あの』って何!? 私の存在は、商業ギルドでどんな風に認知されているの!? 私は内心の嵐を隠しつつ、さらに続ける。

「ゲームは逃げませんし、説明しやすいように草案も作成しておきますので、今日のところはお帰りがれください」

「ミオ様……」

ぷぷっ……と小さく吹き出すミディアンナにサムズアップしながら、私は扉の方向へと手を向けた。

「マット……お前をミオ様付きにする」

そんな私の行動など意に介さず、ギルマスであるフェルディナントさんが突然ふざけたことを言い出した。

「はあ!？」

「……はっ!」

しかも、私が素っ頓狂な声を上げたにもかかわらず、マットさんは受け入れた。

これはつまり、マットさんが個人専属の職員になることを意味する。だから！ 一体全体、商業

ギルドでの私の評価は、どうなってるのよ!？」

マットさんは、懐から羊皮紙を取り出し、私に渡した。

「ミオ様、こちらの便箋で都合のいい日時をお知らせいただけますでしょうか？ 私が、そちらへお伺いさせていただきますので、今後のことをお話しさせていただきます」

「……わかりました。師匠とも相談して、お知らせいたします」

ただの羊皮紙に見えるけど、どうやって使うんだろう？ まあ、鑑定がそのあたりを教えてくださいなろう。

「ありがとうございます。では、我々はこれで失礼いたします」

きっかり腰から一礼し、ギルマス、サブマスとともに退室していったマットさんに見惚れながら、師匠に相談しなくちゃな……と思う私だった。



その後、家に戻った私は、師匠にこのことを話した。

「それで、アイディアとなる住民参加型の『ピングゲーム』とやらを、ミオ専属になったマットに教えるのですか？」

「はい。私がいかに外に出られないのを知っているからか、こんな予定伺いの便箋までいただいたчийいました」

靴から取り出してみせれば、師匠は「ああ……」と納得の表情をした。

「こちらに来てもらうなら、明後日にしてください。明日は、私と一緒に聖域へお出かけですからね」「はい」

優しい雰囲気ふんいきで微笑ほほえまれて、私も満面の笑みで応こたえた。だって、師匠が聖域に行くのは今回が初めてで、とつても嬉うれしそうなのである。

「それにしても、ミオにとつては馴染なじみあるゲームでも、こちらでは初。これは、アイディア申請も一緒に頼んでおいたほうがいいですよ」

「アイディア申請？」

「その人のアイディアを不当に独占・販売されないための保護制度ですね」

「なるほど」

特許とくしよみたいなものか。それがあれば、確かに安心だね！

「もともと、最近使用した者はいませんが……」

ん？ なにかぼそつと呟つぶやかれたような？ 私が師匠を見上げて首を傾かじげれば、見事な微笑ほほえみで返された。

「ジョウは納得した様子ようすで頷うなづいている。

（ねえ、ジョウ！ さっきの師匠の言葉、聞こえたんでしょ？ 教えてよ）

（なに……適材適所てきざいとしよだということだ。ミオはこの世界を楽しんでおればよい）

（はあ……）

結局、ジョウは何も教えてくれなかった。

まあ、いざれわかることでしょう。

第三話 全大陸商業ギルド会議

「なんですか!? この別紙べつしというのは!」

私——商業ギルドのヴァルラ支部のギルドマスター、ゲイルは今、とある画面に視線が釘くわづけになつていた。

離れたところから複数の人間がやりとりできる画面を出した瞬間に、怒声いかげんが響ひびいてきた。声の主

は、その勢いで自身の机を激しく叩き、痛みに悶絶していた。

(彼は……聖国の街ハサレーに支部を置く商業ギルドのギルドマスター——アホノ・コカ)

画面下に表示されている所属支部と名前を見た私は、内心で首を傾げる。なぜ彼は、ここまで激昂しているのか？

吠えているコ氏の前にも、一つにつき一人の顔が映った画面が百以上は浮かんでいるはず。

画面の大きさは横二十センチ縦十五センチぐらいだが、これだけの数が目の前に並ぶと、少々圧倒されるものがある。

「その書類に、問題でもありませんか？」

私は、醜態を晒すコ氏に思わず問いかけた。

「大ありだ！ 例えば、ゲイル氏のヴァルラ支部は七分分配される高級ポーションが、我々——ハサレー支部の分配数は三つだけ！ 街の規模は、千人ほどしか変わらないのに、この差は到底納得できません！」

私のヴァルラ支部は、クリーク連合共和国の深層の森付近にあり、三千人以上が住んでいる。また、深層の森に接していないものの魔物が存在する山も有している。

領都の隣にあるただの街のハサレーとは、魔物の脅威度が違うのだ。

「配布された声明文を、ちゃんと読まれましたか？ この場にいる全員が、既に熟読されている

と思っておりましたよ」

「はっ!? これがなんだと言うのだ!? どうせ、マジックバッグにでも溜め込んでいたものを放出するだけだろう？ そもそも、素材採取担当という『ミオ・マグワイア・テラオ』とは誰なのだ？ 正体も明かしていないのに、別紙も何が『前線に、最大限の援助を』だ、笑わせる！ 配る場所も選り好みしよって！」

私の言葉を鼻で笑ったコ氏は、自分の考えが正しいと信じているようだ。

『高級ポーション不足への救済対策』を読んで、私は驚愕した。それは、目の前の画面に映るギルドマスターたちも同じだろう。

そして確かに、発案者の『ミオ・マグワイア・テラオ』は謎の人物だ。

商業ギルドの本部へ問い合わせをしても、制限がかかっており、ギルドマスターの私でさえ何もわからなかった。

ただし、高級ポーションの素材は、聖域でしか採れない。聖域に入ることができるのは、聖国の教皇か加護を持つ者……つまりは、そういうことだ。

今正体を明かせば、とんでもない騒ぎになるのは目に見えている。だからこそ、賢者エイル・リユタ・ラ・マグワイアが責任者となつての発表なのだ。発案者として、名前を出しているだけでも天晴れである。

しかも連絡役に、フリーター王国の宰相ダニーロ・フェルタ・アルダートと、深層の森の番犬ロレンツォ・アターキルが名を連ねている。

少し頭を捻れば、わかるだろうに……

私は、なおも地団駄を踏む愚者を憐れみの目で見る。久しく現れなかった愛し子かもしれない彼女の願いは、『前線に、最大限の援助を』。

『深層の森』とともに生きる人間にとって、これほど感銘を受ける言葉があるだろうか。安心して背中を預けられる相手が、相棒以外に存在するとは。

「なぜ私が、正体も明かさぬ者の願いなど聞かなければならんだ!? 持つておるならば、早く出せばいいものを! 私が適正価格で買ってやっ、たというのに……何が声明文だ!? もったいぶったやり方をしおって!」

分配数に地域差が出るのは仕方のない話だ。そんなことすら理解せず、また勇氣ある決断をしたミオ様に感謝もしない。

ただ喚き散らし、己の権利だけを主張するギルドマスターに、目の前に並ぶ人々の表情が嫌悪に染まっっていく。

この会議の中心人物である、クリーク連合共和国の首長にして、商業ギルド本部のグランドマスター——ピアチェルト様を見ると、黙ったまま少年のような顔に笑みを保っていらっしやる……い

や、待てよ? そもそも、全大陸商業ギルド会議の開会の宣言を聞いていない気がする。

商業ギルド会議は、グランドマスターの『開会の宣言』があつてからの発言が生きてくる。つまり、開会宣言前の発言は、私語と同じ扱いである。

要は、コ氏の抗議は体を成していない、ただの文句である。

「だから、私はここで提案します! ミオ・マグワイア・テラオなる者から高級ポーションを接収または買い取り、我々商業ギルドで救済対策を行うことを!!」

(あつ……コイツ、本物の馬鹿だ)

会議に参加する全支部のギルドマスターの思いが一致しただろう。

「ハサレー支部は、高級ポーションの分配に不参加なんだね。了解! いやあ、会議の開会宣言前に決意表明してくれて、一つ手間が省けたよ!」

初めて口を開いたピアチェルト様は、口角を上げ、意地の悪い笑みを浮かべている。

「は?」

「今回の緊急会議は、高級ポーションの分配への参加に関する意思確認も兼ねてたの! 支部によつては、高級ポーションの水増し被害を免れたところもあつたからね。ハサレー支部は、なんか高級ポーションの当てがあるんでしょ? よかつたじゃん! ……ね?」

「な!? そんなわ——」

「『『『『『『はじー』』』』』』」

異議を申し立てようとしたコ氏の声は、他のギルドマスターたちの声に掻き消された。

この馬鹿は、味方が一人もいない状態に驚き、画面から姿を消した。多分、椅子から崩れ落ちたんだろうな。

「さっ、ちよほど彼も画面から消えたし、了承してくれたようであり！彼の支部の魔力信号は切っちゃって！」

「畏まりました」

「ピアチェルト様！おゆ——」

ぶっっっ！！

「さっ、うるさいのもいなくなったし、さっさと参加の有無の確認をしちゃおっか！」

「『『『『『『はいー』』』』』』」

先程の冷笑はもの見事に消え去り、ピアチェルト様らしい明るい笑顔が戻った。

コ氏を容赦なく切り捨てる様は、明るい笑顔からは想像もつかない。

彼の姿は、長命なエルフという種族の特性上、色々と見かけ通りではない。それを再確認した我々の肝は、冷え切っている。

……小さな街の商業ギルドのマスターごときが、一国の重鎮たちを相手に、何をトチ狂ったのか。

私はコ氏が映っていた場所を見つめ、内心でため息をついた。



「シユテル」

「はっー！」

「ハサレー支部に、至急で代理のギルドマスターを派遣して。護衛もつけてね。現ギルドマスターアホノ・コ氏は、即刻で除名手続きを」

「畏まりました」

「『『『『『『えっ?!』』』』』』」

僕——ピアチェルトの執事シユテルに対する指示に、画面に映るみんなに動揺が広がるのが見えた。こればかりは仕方ないけど、当然の措置だよな。みんなもそれがわかっているのか、動揺しつつも、反対の言葉は出なかった。

うるさい蠅が湧くとは思ってたけど、まさか開会宣言前から食いついてくるとはねえ。エイルが言っていたように、これは、ウルシア様が具現化してでも望むことだしね。失敗はできない。僕にできることは、邪魔になる障害物はさっさと排除することだけさ。

後は頼んだよ、エイル。

第四話 守護精霊、誕生！

「さあ！ ついに来たんですね!! 聖域に!!」

えらく興奮している師匠に気圧されて、ついにこの日を迎えたミオです。みなさん、おはようございます。

「師匠、少し落ち着きましょうよ」

「きゅきゅう？（大丈夫？）」

生まれたばかりのカーバンクル（？）のきゅうちゃんが心配そうにしている。

『そうだぞ、少し落ち着け。気持ちはわかるがな』

ジヨウの言う通り、興奮する師匠の気持ちはわかる。

師匠は、神の加護を持つ者が多いという魔從族の研究の第一人者な上に、薬草関連も研究している。そんな彼が聖域に来られたのだ。興奮しないわけがない。

『ようこそ。ミオ様、エイル様』

いつの間に立っていたのか、木精霊のドリアンがいた。気配を感じず、少しだけ驚いた。

「うおっ!? ……ドリアンじゃない!? お邪魔します! ……少しやつれたように見えるけど、元氣してた?」

鮮やかな緑の髪が、少しだけくすんでいる気がする。

『私は、大丈夫でございます……前回のことで、ミオ様たちのガイド役を仰せつかったのでございます』

「そうなの？ 聖域は全つ然わからないから、案内してもらえたら、とっても助かるよ!」

本当に助かる。ついでに貴重な薬草の群生地なんかも教えてくれるともっと助かる。いや、その

前に――

「あつ、新しく連れてきた人がいるから紹介するにえ! 私の保護者兼師匠で、えっと……」

「エイル・リュタ・ラ・マグワイアと申します。よろしくお願ひしますね!」

「……だそうです!」

（完全にフルネームを忘れていただろう?）

ジヨウが念話で突っ込んできた。

（だって! こっちの人の名前って無駄に長いんだもん! あつ、でも、マグワイアは覚えてたんだからね!）

立ち読みサンプル
はここまで

ジョウに呆れた視線を向けられてしまった。

（ドリアンはやつれているが、前回、完全に気配を消したウルシア様に、素材採集で精霊たちがはしゃいでいたのを見られていたからな。ドリアンは、代表者として少々苦言をいただいたのかもしれん。だが加護者は、本当に久しぶりだと言うし。ウルシア様も、精霊の嬉しい気持ちは理解できるのだろう。だからこそ『ガイド役』か）

（そうだね。前は少々羽目を外しすぎていたからね……）

そんな風にジョウと念話している間、きゅうちゃんは、興味津々で聖域のあちこちを飛び回っている……

『飛び回ってるっ!?』

私とジョウの驚きの声に、きゅうちゃんは「なあに？」と言わんばかりに首を傾げながらも、一メートルくらい浮き上がってあちこちに飛ばたいていた。そんなにきちんと飛べるんだね……

『ところでミオ様、守護精霊の方が見受けられませんが、まだ生み出されておられないのですか？』そんな私とジョウの驚愕なんてなんのその、ドリアンはキョロキョロとあたりを見回しつつ、私に尋ねる。

「そうなの！ あれからも忙しくて忙しくて……決して、忘れてたわけじゃないのよ？」

頬に手を当て「困ったわぁ」とやる仕草は、完全に、井戸端会議のおばちゃんである。

「なんの話ですか？ 紙の話ですか？」

私とドリアンの話に割って入る師匠の腕には、きゅうちゃんが収まっている。あちこちに行つて見失つては大変だからと師匠が保護してくれたのかな？

師匠は以前、私がドリアンから貰った、妖虫お蚕様の魔法紙に興味を持っていた。それは私が守護精霊を創造する際に使うもの。そういえば、紙を貰った話はしたけど、そのあたりはきちんと説明していなかったね。

「実は——」

私が創世神ガイア様からいただいた加護の効果について、師匠に話す。ドリアンから貰った特製の魔法紙は守護精霊を作るためのものであることも。

創世神ガイアの加護…加護を授かった者の守護者を創造（チャンスは一度のみ）。方法は魔法紙に姿形を描き、能力の詳細を書いて、「クリエイション」と唱える。

「それは、すごいですねえ……ですが作るのは、精霊でなくてもいいのではないですか？」

「確かにそうかもしれませんが、パツと思いついたのが精霊だったので、これも縁だと思います。今日これから作ってみますにえ」